

曾根崎心中における語句の異同と 「け」の字体について

坂 梨 隆 三

はじめに

曾根崎心中の諸本は近松作品としては比較的多く伝えられている。それらについては山本とも子(1963)、森修(1970)、鶴見誠(1978)ほかに書誌も含めた詳細な研究がある。山根為雄(1981)ではそれらをふまえて、曾根崎心中諸本の刊行順についても新たな見解が示されている。それまでは、六行四十三丁本(以下、六行本とする)を正本として最初に刊行されたものとする見方が多く行われていたのを、八行二十五丁本が最初に刊行され、そのあとに六行本が続き、さらにその後、八行二十六丁本(以下、八行本とする)が刊行されたものとされたのである。以来、それに従うものが多い。

曾根崎心中の初版本とみられるものが大阪府立図書館にあるけれども、それには一丁分の欠落があり、また、奥書も欠いている。そのため、従来は『近松全集』(岩波書店)などのように、欠落部は八行本で補うという方式がとられてきた。そこに近年、神津武男氏はこれまで存在の知られなかった「曾根崎心中」八行二十五丁本の初版完本を発見し、曾根崎心中刊行の順序についてもまた新しい見解を示された(神津2009、2011)。

山根氏が、八行25丁本→六行本→八行26丁本の順序で刊行されたものとされるのに対し、神津氏は、八行25丁本→八行26丁本→六行本という順序で刊行されたものとされる。

曾根崎心中の初版本は神津武男(2009)にその写真が載せられている。本稿ではそれを使用させていただく。

曾根崎心中の本文は「げにやあんらくせかいより」と始まる。冒頭「げにや」の最初の文字「げ」が初版本では[介]([介]を字母とする仮名をこのように表す)、六行本、八行本では[け]で表されている(濁点の有無については本稿では深く関わらない)。

本稿では、一、山根(1981)で取り上げられた十四の語句の中の五つに、新たに「けふり」を加えて検討し、二、として、冒頭の文字[介]、[け]の字体について眺めていきたい。

山根氏は曾根崎心中の「語句の異同」について、山根(1981)では初版本・六行本・八行本の三本を対比して示し、その後、山根(2004)においてはさらに七種の曾根崎心中を加え、十種の諸本

について極めて詳細に詞章、文字譜、曲節などの異同を対比されている。そしてまた八行本の埋木改刻箇所に関してはさらに二種を加えて比較されている。

ここではもっぱら、その語句と一つの字体について見るものであることをお断りしておく。

本稿では(1)初版(八行25丁)本、(2)六行本(『正本近松全集』勉誠社[1978]による。和泉書院の複製本あり[松平進編]1983)、(3)八行26丁本([1]明治大学図書館蔵、[2]山口大学図書館蔵、[3]東洋文庫蔵、[4]東京大学国語研究室蔵の各本を参照した)の三種の本に加えて、(4)八行24丁本(京、山本九兵衛版、加賀掾、大阪府立図書館蔵)、以下、[加]と括弧に入れて略称する。以下も同じ)(5)絵入り十・十二行16丁本(吉永孝雄氏旧蔵、鶴見誠氏蔵写真による[絵入])(6)十行16丁本(東京大学総合図書館蔵、京、八文字屋八左衛門板[八文])の三本を比較対照した。そしてまた適宜、次の諸本を参照した。

(7)[1]八行24丁本(東京女子大学蔵[東女]。[2]天理図書館蔵本も同版)。(8)八行24丁本(平兵衛版、早稲田大学図書館蔵、桜楓社複製本[1967]あり)[平]。(9)八行33丁本、正本屋七兵衛・正本屋喜右衛門版[天理図書館蔵][喜]。(10)七行38丁本、西澤藤九郎・九左衛門板(天理図書館蔵。[西])。(11)七、八行48丁本[豊竹若大夫]守随憲治氏蔵。七行部分は(10)に同じ。[若]。(12)十四行(2丁を欠くため)19丁本(台湾大学蔵。[台])。(13)段物集『浄瑠璃連理丸』所収(東京大学総合図書館霞亭文庫蔵十五行26丁。[連])。(14)段物集『浄瑠璃拍子扇』所収(東京大学教養学部図書館蔵十二行30丁。[扇])。(15)絵入十四行9丁半本(山本九兵衛版、天理図書館蔵。[絵天]。大橋[1997]、山根[2004]も参考にした)。(16)八行24丁本(福井文書館蔵[神津2011による][福])。

これらの書誌についてはすでに記した諸氏の著書・論考にゆずる。

第一章 語句の異同について

1 「けふり」と「けぶり」

これは、濁点の有無についても細かく取り上げている従来の諸研究において、ほとんど取り上げられていない。山根(1981,2004)においても何故か言及されていない。しかし、これは濁点の有無という単なる表記のちがいではない。ケブリ・ケムリという、語に関わる問題である。

初版本に「むじやうのけぶり」(2ウ)とある「けぶり」が八行本には「けふり」とあって、濁点がない。六行本も「けふり」である。今、八行本の1~4丁について濁点の有無を見ると、濁音である163箇所のうち、濁点のついているのが158箇所ある。濁点のないのは5箇所で、比較的高い割合で濁点が付けられていると言ってよいだろう。そうすると八行本の「けふり」の「ふ」は濁点の付け落ちというより、もともと付けなかったものともみられる。初版本の「うすけふり」(3オ)は八行本でも「うすけふり」である。六行本も「うすけふり」。近松作品には「け」に濁点を付した「うすげふり」という表記がいくつか見られるのだが、そのことから、そのような「ふ」がブで

はなくムとよまれるものであることがわかる (坂梨 1985 参照)。

初版で「けぶり」とする箇所を同じく「けぶり」とするものに [八文] [連] があるけれども、参照した他の諸本はすべて「けふり」である。「うすけぶり」とするものは一例もない。[八文] [連] もこれは「うすけふり」である。「煙」はケブリではなく、ケムリだったのである。

2 初版本の「きうほんじ」(4オ)が六行本・八行本では「くほんじ」となっている。山根 (1981) には「谷町の『久本寺』は現在も『クホンジ』と称しているから六行本が正しい。26丁本は埋木によって正しい呼称に改めたものである」とある。これは初版本の拠ったものに「久本寺」と漢字書きされていたものを初版本は「きうほんじ」としてしまったのではなかろうか。[連] では「久本寺」(「本寺」にはかすかにルビも見える) と漢字書きになっている。

初版本に「あづちまち」、六行本に「あづち町」とあるところが、「絵入り十四行本 (天理図書館蔵) [絵天]」には「あんど町」とある。これは [絵天] が拠った稿本には「安土町」と漢字書きされていたものを [絵天] は「あんど町」と読んでしまったのであろう。とすれば、この箇所について [絵天] は初版本には拠っていないと言えそうである。「久本寺」について [絵天] は「くほんじ」とするから、これについては初版の方が読みを誤っている。初版本、[絵天] がそれぞれに拠った稿本にはこれらの箇所が漢字書きになっていたのではないだろうか。

同じく、初版本「出ちやのここより」、六行本「出ちやのここより」が [絵天] では「出ちやのゆかより」である。これも、もとにした稿本には「床」と漢字書きされていたのだろう。それをあえるものは「とこ」と読み、一方は「ゆか」と読んだのではないか。

動詞の連用形が「ききて・きいて (聞)」「とりて・とつて (取)」「もちて・もつて (持)」「いひて・いふて (言)」のように、あるものは原形で、あるものは音便形で表れることがある。これも、それぞれが拠った本に「聞て」「取て」「持て」「言て」とあったのが両様に読まれたものともみられる。当時、活用語尾は送らないのが普通だった。次の3もまた同様に考えられる。

3 初版本「ごとうのおほいち」(5オ)の「おほ」が六行本・八行本では「大」と漢字になっている。山根 (1981) には「『竹本極秘伝』…に同所 (新地本中町二丁目 = 山根氏注) 大都」とある実在の人物である」とあり「この呼び方は『オオイチ』と考えられるが」としつつも、結論として「ダイイチ」説がとられている。右に、「『オオイチ』と考えられるが」とある根拠はいかなるものであろうか。平家物語の覚一本や「耳なし芳一」等を思えば「一 (いち)」の直前を音で読むのに不都合はないように思われる。

4 初版本に「(おやかたと) うけあひきはめ」(6ウ)とある箇所が、六行本は「談合きはめ」、八行本は「たんかうきはめ」である。これらの違いは他の語句の異同にくらべて大きいように思われる。山根 (1981) には「『おやかたとうけあひ』を『きはめ』るのは聊か適切でない感もする。『親方に請合ひて』とでもあるべき所か」とある。ここで次のような推測はできないだろうか。初版本の拠ったものには、当該箇所に漢字で「談合」とあった。それはもちろん行書で書かれていたであろう。初版本はそれを「請合」と読んでしまった。書体字典などで「談」と「請」とを見ると、両者

は似ているところがある。拠った本に「談合」とあったものを初版本は「請合」と見てしまい、「うけあひ」とした。六行本は正しく「談合」と読んだ、あるいは実際の語りによって訂正したとも考えられる。初版本の「うけあひ」(7行目)と同じ丁に「だんかう」はすでに一度見えている(4行目)。八行本では最初の例は「だんかう」(7ウ4行目)で、初版本の「うけあひ」にあたる箇所は「たんかう」(同7行目=埋木)である。六行本では、最初の例は「だんかう」(14オ3行目)、次にくる例(同6行目)が「談合」である。

十四行絵入り本〔絵天〕には、この箇所が「うけ合きはめ」(3ウ)とある。これも、漢字書き「談合」の「談」を「うけ」と読んでしまい、「合」は漢字のまま残したものと考えられよう。見やすく示せば次のようになる。

談合→〔初版〕うけあひ 〔絵天〕うけ合 〔八行〕たんかう 〔六行〕談合

なお、この「(われにかくして)おやかたとうけあひきはめ」が〔加〕では「我にかくしてうなづきあひ」となっている。この「うけあひ(きはめ)」は、(1)～(16)の諸本において他の十三の諸本はすべて「だんかう」(ここでは清濁は問わず)である。

5 初版本「はやうもどしておやかたさまのきげんをとらんせ」の「を」が六行本では「をも」、八行本では埋木の際に誤って「おも」としている。山根(1981)には、意味的には首肯されるが、「埋木する際に格助詞の『を』を『お』にしてまでも「も」を挿入する必要があったか疑問が残る」とある。しかし、「お」は「を」とすべきところを誤って「お」にしてしまったものと思えば「を」を挿入しようとした意図は理解されよう。

6 「はらへばくさにちるつゆの」(22オ)の「はらへば」が八行本では「はらへど」(23オ)である(六行本37ウは「はらへば」)。八行本のこの箇所は初版本を改刻しているところにあたる。切りよく「そねぎきのもりにぞたどりつきにける」で第21丁を終わらせるために、初版本21丁の終わり二行と22丁の初め二行を改刻している。そのために無理が生じ、八行本22ウの終わり二行は32、33字詰めと窮屈で、逆に23オの初め二行は17、14字詰めとなっていて文字も間延びした印象を与える。意味からすれば、「はらえば」という順接の方が自然だが、そういった改刻に際して、「ば」を「ど」に誤ったのであろう。

7 初版本「たよりは此はる聞たれは」(24ウ)については、「『たよりは』の『は』が六行本にないのは脱漏であろう」と山根氏の言われるとおりでらう。なお、山根氏はこの箇所を「…(聞たれ)は」と読まれているが、この「は」は「共」とも読めそうだ。山根氏の言われるように、「は(者)」の変体仮名と「共」の草体とは似ている。初版本も「は」ではなく「共」のつもりだったのが「は(者)」に似たかたちになってしまったものではないか。この箇所につき、新日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 上』には「底本、『共』の字体は、一般に『共』とまぎらわしい「は」に近いが、なお『共』と見ておく」とある。山根氏の言われるように当該箇所は意味的には逆接の方がふさわしい。

以上、語句の異同について見て来た。

初版本では、最初にある観音めぐりの段は三丁分であるが、八行本ではそれを四丁にしている。これによって初版本より一丁ふえている。六行本では観音めぐりの段に六丁をあてる。観音めぐりが、八行本では初版本よりも一丁分ふえたことにより、その分紙面に余裕ができたことになる。観音めぐりにおいて、初版本、六行本では漢字で書かれているところが、八行本では仮名書きになっているものが多く見られる。

我ら→われら 西国→さいこく 寺→てら 夏の虫→なつのむし 上寺町→うへでらまち 谷町→たにまち 経堂→きやうだう 金堂→こんだう 清水→きよみづ 天王寺→てんわうじ 生玉→いくだま 六時堂→六じだう

六行本も初版本の漢字を仮名書きにしたものが多い。

順礼→しゆんれい 藤→ふぢ かう堂→かうだう 打かきあはせ→うちかきあはせ 道引→みち引 情→なさけ

八行本も第三丁から四丁中ほどにかけては字も大きめでゆったりしている。ところが観音巡りは四丁内に収めようということからか、四丁表の中ほどから字詰めがやや窮屈になっている。

字詰めがとくに窮屈に見えるのは、6でふれた道行きの段、八行本22ウの終わり2行(7, 8行)である(7行目は32字、8行目は33字)。それに続く23オの初め2行は反対にゆるやかすぎる(1行目は17字、2行目は14字)。

これはお初・徳兵衛の道行きを切りよく22丁内に収めようとしたためである。初版本では道行きは22オの1行目にかかっている。その1行目最後の二文字「かし(こにかこゝにかと)」から心中の段となるのだが、道行きの段と心中の段の間に切れ目はなく本文は連続している。それに対して八行本は段の切れ目と丁の切れ目を一致させようとしたのである。

八行本のこのような本文構成の変改は道行きの特設した点にも見られる。すなわち、天満屋の段は、初版では、19ウ「いのちのすゑこそみじかけれ」で終わるのだが、直ちにそれに続けて道行の「此よのなごり夜もな(19ウ)/ごり(20オ)」と続く。八行本は20ウの最終行を「みじかけれ」で終わり、いくぶんかの空白を残して、21オは「曾根崎心中 徳兵衛/おはつ 道行」という表題を設け、行を改めて「此よのなごり」と始まる。

六行本は右のような変改はなく、初版本と同じく、場面の切り替わる箇所においても文は直接している。このように本文の構成という点から見ると八行本は六行本よりも後かとの印象もうける。

六行本も観音巡りの字配りはゆったりとしており、初版では漢字である箇所を仮名書きにしたものも多い。しかし、観音巡りに初版の倍の丁数を要したことからか、続く生玉社の段に入ると、初版では仮名であるところが漢字書きになっている例が多くなる。

徳びやうゑ→徳兵衛 とく→徳 ちやうきうじさま→長きうし様 まち→町 うち→内 しゆ→衆 こゝろ→心 いのち→命 まづ→先 ばかり→斗 これほど→是程 きいて→聞て ごろ→比 もの→物 さりながら→去ながら このしやうぢき→此正直 むすめ→娘 ことば

→詞 大ざか→大坂 かしこまつた→畏た しゃうゆどひや→醤油問屋 それがし→某 たの
 み→頼み うけとつたり→請取たり はゝ→母 かたじけなし→忝し 折→おり ぞんずれば
 →存ずれば 心たしかに→心慥に まで→迄 二くはん→二貫 とき→時 ふできせんばん→
 ふでき千万 さけ→酒 おちやうしゆ→お町衆

第二章 [介] [け] について

一 [介]

初めに記したように 曾根崎心中の本文は「げにやあんらくせかいより」と始まる。冒頭「げにや」の最初の文字「げ」が初版本では [介] であるが、六行本、八行本では [け] である。曾根崎心中には「げに」が次のような四箇所に表示される。

- (1) [介]"にやあんらくせかいより (初版本 1 オ)
- (2) [介]"によい [介] いでんし (同 2 ウ)
- (3) [介] に思へ共なげゝとも (同 20 ウ)
- (4) 今ぞ [介]"にうきよのちりをはらふらん (同 23 オ)

「げに」の「げ」は、初版本ではすべて [介] である。ところが、六行本、八行本は、最初の「げにや」は [け] である。それ以外はすべて [介]。

この冒頭の「げにや」について [介] とするものと、[け] とするものを分けて示す。

[介] とするもの：[初版]。[八文]。[加]。[絵入]。[台]。[連]。

[け] とするもの：[六行]。[八行]。[西]。[若]。[平]。[東女]。[喜]。[扇]。[絵天]。[福]。((3) が [絵天] では「[げ] に」[8ウ]、(4) が [西] では [げ] で表れる [34ウ])。

以下、曾根崎心中における [介] [け] の使用状況について見ていく。

1 字音には [介] が多い。

一口に字音というけれども、その中では「ケツ、ケウ (ケフ)」という字音を含む語の例が曾根崎心中にはたまたま見えず、表れるのは「ケン (ゲン)」の例が多い。しかし、[介] の表れ方としては、字音「ケ・ゲ、ケイ・ゲイ、ケツ・ゲツ」の場合よりも字音「ケン・ゲン、ケウ・ゲウ (ケフ・ゲフ)」の場合において [介] の表れる傾向の高い様子もうかがわれる (注1)。

字音中の [介] は次のように表れる。

[介] し (芥子)：[八文] は [遣] (「遣」を字母とする仮名)、[絵天] は [け] とする。きやう [介]"ん (狂言)、[介]"んざい (現在)、しう [介]"ん (祝言)、き [介]"ん (機嫌)、じ [介]"ん (示現)、せ [介]"ん (世間、[絵天] は [け])、[介] んせ (現世)、く [介]"ん (苦患)

初版本には「[介] んによ」(権輿、11ウ)とある箇所が、六行本(21オ)にだけ、「[け] ん/によ、とある。「けん」は最終行末にあり、「によ」から21ウに移る。ここでは、「け」が最終行末にあるということに注意しておきたい(注2)。

[介] いでんじ(慶伝寺2オ)が[西]では[け]、[八文]では[遣]で表れている。[八文]に[遣]が表れやすいことについては後に示す。

2 「今日」はほとんどが「[介] ふ」である(4ウ、14オ、20ウ [2例])。

これについては、すでに各時代の各資料についてそのような傾向にあることが多く指摘されている。矢田(1995)には『青谿書屋本土左日記』における用法について詳しく記され、そのほか迫野(1974)では定家の用字法について、久保田(1995,1997,1998,2009)、矢野(1990)、内田(1998)等では主に近世後期の諸作品を調査した上で、「今日」が「[介] ふ」で表れやすいことが指摘されている。市地(2015,2016)によれば馬琴の読本では[介] [け] 双方の例が表れる。

曾根崎心中においても、「今日」は「[介] ふ」で表れるのが普通だが、[連]の、

あやなやきのふけ/ふまでもよそにいひしがあすよりは我もうはさのかずに入
においては[け]である。ここは[け]が行末にあることも関係しているかもしれない(注3)。

3 助動詞「けり」は「[介] り」とすることが多い。

これに関しては同様のことが他の資料についても指摘されている。久保田(1995、1997、1998、2009)、矢野(1990)、内田(1998)など。市地(2015、2016)によれば作品により[介]が多いものの、[介] [け] 双方の表れるものがある。

有[介] る(1ウ)、つきに[介] れ(4オ)、ひたし[介] り(6オ)

など16例すべて[介]である。ただし、[八文]では、右の[有[介] る](1ウ)に相当する箇所は「有[遣] る」であり、「[かへり[介] り](12ウ)に当たる箇所は「かへり[遣] り」である。「そしらぬかほしてゐたり[介] り」(15ウ)が[絵天]では「…[け] り」(6オ)である。「つきに[介] る」(22オ)も[絵天]は「つきに[け] /る」(9オ。この[け]は行末にある)。また、「なき[介] れば(24ウ)が[絵天]では「なき[け] れば」である。このように[絵天]には「け」がよく表れる。

また、「恋の手本となりに[介] り」(25ウ)の[介]は[加賀]、[絵天]では[け]とある。

『青谿書屋本土左日記』には助動詞「けり」が70例見える。そのうち、68例は「[け] り」であり、2例だけが「[介] り」である(一月卅日、二月一日)。定家筆『土左日記』では逆に「[介] り」とするものが67例あり、「[け] り」とするものは2例(二月七日、二月十五日)。『青谿書屋本土左日記』に「[け] り」とある箇所が、定家筆本では欠けているところが一例ある(かみのみこゝろなりけり→神のみこゝろなり [二月五日])。

4 形容詞已然形活用語尾には[介]を用いる傾向が見られる。

「かくすではな[介] れ共」(6オ)は、[加賀]だけが[け]とするけれども、それは「かくすではなけ/れ共」(6ウ)と、[け]が2行目の行末に来ている箇所である。また、同じ行の中ほど

に「ひたし〔介〕り」と〔介〕があるので、同字の反復を避ける意識も働いているかもしれない。それらのことが「け」出現の理由として考えられないだろうか。

ところが、「(此銀が) なければわれらもしなねばならぬ… (13オ)」においては、〔六行〕(23ウ)、〔八行〕(14オ)、〔八文〕(9オ)も〔け〕である。いっぽう、〔東女〕(13オ)、〔絵入〕(9オ)、〔絵天〕(5オ)は〔介〕とする。〔初版〕、〔六行〕は、「なければ」と同じ丁にある「いひかけ・なげき」も〔け〕である。〔初版〕で、その直前(12ウ)には〔け〕が5例、「〔介〕り」が助動詞として2例見える。また、「せうこな〔介〕れば」が〔絵天〕は「な〔け〕れば」(6ウ)である。

これによれば、助動詞を「〔介〕り」とする傾向は強く見られるのだが、形容詞已然形活用語尾の「けり」については助動詞「〔け〕り」の場合ほど〔介〕の表れ方は強くないと言えそうである。

(めが)しげ〔介〕れば(15オ。この箇所、〔絵入〕(10オ)、〔絵天〕(5ウ)は「しげゝれば」と踊り字)。(せうこ)な〔介〕れば(17オ)は諸本すべて「介」。

「みじか〔介〕れ」(19ウ)は、〔六行〕34ウ、〔東女〕(19ウ)、〔絵天〕(8ウ)では「みじか〔け〕れ」。〔八文〕は「みじか〔遣〕れ」(13ウ)である。

この箇所は天満屋の段で、「命のすゑこそみじかけれ」と終わり、文字の切れ目もなくすぐに次の道行「此よのなごり夜も(なごり)」に続いていくところである。〔八行〕は「此よのなごり夜もなごり」を次丁(21オ)2行目に移す。一行目に、表題「曾根崎心中 徳兵衛 / おはつ 道行」を設けたためである。〔六行〕の〔け〕には、それが段の最終末部にあるためということも考えられる。

諸本を見渡すと、助動詞「けり」の場合には〔介〕が多いことに比し、形容詞已然形活用語尾では、そのほかに〔け〕〔遣〕も表れることがある。

これは形容詞の活用語尾「けれ」と助動詞「けれ」とは異なるものであるという認識はありながらも同じような形をしていることで、形容詞已然形活用語尾においては〔け〕の表記に揺れが見られるということではなかろうか。

5 げな

a ふまれてしなんした〔介〕”なといふも有(14ウ)

は、六本すべてと〔連〕は「〔介〕な」である。いっぽう、〔西〕、〔若〕、〔喜〕、〔台〕、〔絵天〕は「〔げ〕な」。

b そなたもをれにほれてじやげな(17オ)

は、〔初版〕、〔六行〕、〔八行〕、〔八文〕、〔西〕、〔若〕、〔喜〕、〔台〕、〔連〕、〔絵天〕で「〔け〕な」。いっぽう、〔加賀〕、〔絵入〕は「〔介〕な」である。

これについては「〔介〕な」と「〔け〕な」とはゆれている。これは助動詞であるから語頭に立つものとは言いがたい。さすがは語中尾の用法として「げ」とあってもよさそうである。実際、〔げ〕とするものが多い。しかし、これは副詞「げに」とも似ている。副詞「げに」は見てきたように「〔介〕」が優勢であった。それに引かれて「げな」のほかに「〔介〕な」という表記も表れたと見

てよいのではないか。

二 [け]

1 語中・語尾に多く用いる。もちろん動詞の活用語尾もこれに含まれる。

よあけ(夜明)、よ(避)けて、日まけ、かげ(影)、あけは(揚羽)、くみあげつ(汲上つ)、むすびあげ、なさけ(情)、しげる(繁)、きけば(聞ば)、さけ(酒)、なげ(嘆)かまし、たゝけば、か(懸)けたる、わけ(訳)、うちあけ(打明)て、かけ(懸)ぬ つけて、うけあひ(初版のみ)、申うけ、おつつけ(追付)、つけ(付)て、かたじけなし、いひかけ、まけ、なげ(投)て、うちつけ、な(無)げ、いそげ、はすいけ、とけ、いけて、にげて、さゝやけば、わるくちだらけ、さしのぞけば、ほとけ、心がけ、さけ(裂)ても、さけびいり、いそけ(急)、くだ(砕)けば、など。

(1) 語中尾ではなく語頭に [け] とするものがある。

(a) はこはしごの二つめより / あふき [介] せ共きえかぬる身も手ものばしはたと [け] せ / ば (19オ)

[け] は語頭には用いないという傾向にあるが、ここでは同じ行に「け」が連続して表れる。ここでは初めに [介] を用いているので、重複を避けて、後に出てくる方には [け] を用いたことも考えられる。[六行] では「あふぎ [介] せどもきえかぬる / 身も手ものばしはたと [介] せば」と行を異にしている (33オ)。ただし、[加賀] では同一行にあってともに [け] である (19オ2行目)。

(b) けが(怪我)、あつてはならぬぞと (12オ)

これは六本とも、すべて [け] である。そのほか、[西]、[絵入]、[喜]、[連]、[扇]、[東女]、[平]、[若]、[台]、[絵天]、[福] もすべて [け]。

(c) [介] いでんし(慶伝寺) (2ウ) が [西] では、[け] いでんじ (4オ) である。[八文] は [遣] いてんじ (2オ)。

(2) 語中尾では [け] であることが多いのに [介] が表れている場合がある。

「(らち) あ [介] ふ」というのが9ウに2例ある。

[六行]、[八行]、[八文]、[東女]、[平]、[喜]、[加賀]、[若]、[連]、[西]、[扇]、[台]、[福] にも同じく「あ [介] ふ」とある。(ただ、[絵入] (6オ)、[絵天] (4オ) のそれぞれ最初の例だけは「あ [け] ふ」)。これは、おそらく「[介] ふ (今日)」という慣用の強さに引かれて、「あ [介] ふ」となったものではなからうか。「あ [介] ふ」の「ふ」は意志の助動詞であるが、これは曾根崎心中では「う」ではなく「ふ」で書くのが一般的である (坂梨 1986 参照)。

また、「御なんぎかけん」(24オ)、「なげきをかけん」(24ウ) が [連]、[絵天] には「御なんぎか [介] んもつたいなや」「いかばかりかはなげきをか [介] ん」とした例がある。[西] も前者の例は「御なんぎか [介] ん」(36オ) であるが、後者の例は「なげきをか [け] ん」(37オ) である。

「介」は字音語に表れやすいことを、一の1に記した。右「か〔介〕ん」の「か〔介〕」は動詞、「ん」は助動詞であるけれども、「介」ん（ケン）という音連続が字音語らしくも感じられて、「か〔介〕ん」という表記が表れたものとも考えられる。

「け」は〔初版〕では一四七箇所に表示される。他の諸本で〔け〕としているところが、〔八文〕では次のように〔遣〕で表れることがある（計八例）。これまでも示してきたが〔八文〕には〔遣〕を用いることが多い。

「御なんぎか〔遣〕んもつたいなや（16オ）」「いかばかりかはなげきをか〔遣〕ん（同前）」「〔遣〕いでんじ（慶伝寺）（既出、2オ）」「すだれをあ〔遣〕て（3ウ）」「ちからをつ〔遣〕て（6オ）」「あしにてつ〔遣〕ば（17ウ）」など。

〔連〕には「おやかたのくらうと也て」のように動詞「なる」の連用形を「也」で表した例、「おつ共わつとさげび入」のように「夫も」を「おつ共」と表記した例など、他と異なる書き方もときに見られる。

おわりに

初版本、六行本、八行本は正本として信頼度の高い山本版である。山本版のほかに参照する諸本の数を増やしていけば大方の傾向とは違った様相を示すことも出てくるだろう。本稿でも度々出て来た〔八文〕の〔遣〕はそういうものの一つと言ってよい。

本稿ではわずかの語句と一つの仮名の字体を見てきただけであるが、以下は初版本・六行本・八行本についての調査後の印象である。

初版本（山本版）が出たあとには類版が多く出されたことであろう。それには誤りも多い。そのことは曾根崎心中の奥書に記される文言によっても十分察せられる。そこで山本は序文付きの堂々たる六行本を出した。これは「版面も力強く美麗で、品格のある浄瑠璃本である」（松平進『曾根崎心中・堀川波鼓』解題1983）。しかし、これは全四十三丁（本文は四十丁）と「紙数が多く費用もかかる」（山本1963）だろう。

以下は推測であるけれども、そこで山本は改訂版として紙数も少なくすむ八行の本を出そうとした。その際、六行本と初版本を参考にしたが、観音めぐりでは主に六行本に拠った。その箇所の八行本と六行本の字体等は似ている（注4）。

ところが八行本は観音めぐりに四丁を要した。この要領でいけば丁数が頗るふえることになる。そこで生玉の段からは、ほぼ初版本に従うことにした。しかし、文の構成上はわかりやすく、道行の段を立てた（21オ）。心中の場面（23オ）も丁代わりにあわせるようにした。そのような操作を施したために22ウ、23オの字詰めはアンバランスになっている。

六行本は一段浄瑠璃であるが、観音めぐりはぴったり六丁に収まり、生玉の段は切りよく本文第

七丁初めより始まっている。しかし、天満屋の段、道行、心中の場面には切れ目はない。初版も、観音めぐりは三丁内にぴったり収まっている。また、天満屋の段は前段（生玉）の終わりに空白を残したまま、切りよく14丁より始まるようにしている。八行本が、道行の段を丁代わりに合わせるために、空白を残したままにしているという点では、空白もなく道行に続けている六行本の方が八行本よりも古い形式を伝えているようにも思われる。（注5）

初版、六行本ともに、道行、心中の場面についてはとくに切れ目を設けず、一続きになっている。これに対して、八行本は、まず、道行では天満屋の段を空白を残して終わらせる（20丁ウ）。そうして、次の21オでは「曾根崎心中 徳兵衛／おはつ 道行」という表題をつけて、2行目より「此よのなごり」と始める。

そして21ウよりまた初版と同じ版面に戻すのだが、心中の場面を23オより始めるために22ウの終わり二行は圧縮された字詰めになっている。圧縮された分、23オの初め二行は間延びした字面になっている。そうして、三行目よりまた初版と同じになる。

八行本は内容的には改訂され、構成上も見やすくするために改刻されている。しかし、その版面は多く（4丁～26丁）を初版によっており、語句の改訂は多くが埋木によってなされている。そのような改訂・改刻のために紙面には均一性に欠けるところがある。

もっぱら埋木、改刻によって改訂をなしたというところには、世にあふれる偽書・類版に抗して出版を急ぐという側面もあったのであろうか。

注

(1) 『初心仮名遣』（元禄四年刊）では〔け〕が断然優勢であるが、〔〔介〕んしくよう 〔介〕んしくやう 源氏供養。れう 〔介〕ん れ（ママ）う 〔介〕ん 料簡。くわん 〔介〕ん くはん 〔介〕ん 管弦。てう 〔介〕ん ちやう 〔介〕ん 鄭玄。け（ママ）んばう 染 〔介〕んばう 憲法〕などケン・ゲンには〔介〕が表れる。〔〔介〕う きやう 郷〕のようにケウにも〔介〕が見られるが、「きやう けう 教。でんぎやう てんげう 伝教大師。ゑんのげうじや えんのぎやうじや 役行者〕のようにほとんどは〔け〕である。『類字仮名遣』（寛文六年刊）では見出しの「いろは」の仮名字体は現行の仮名と一致するものが多い。「お」「そ」は形はやや違うが字母は同じ。「え」だけが〔江〕であって異なる。「け」はこの形であり、その見出しの下に割行で「計 〔気〕 〔希〕 景 解 〔夏〕 遣〕が列挙される。ここに〔〔介〕〕はない。但し、本文中には「ゐ 〔介〕 た 井^{カウ}桁」「むねの 〔介〕 ふり 煙」「りよう 〔介〕 ん 料簡 了簡〕のように表れることがある。また、本書では語頭のケはすべて〔気〕で揃えているので、〔介〕で書くことの多い「今日」も〔〔気〕ふ〕となっている。

『広益二行節用集』（貞享三年刊）では、仮名見出しは〔け〕である。漢語につけられた振り仮名を見ると、ケン、ケウ（ケフ）は、初めの「乾坤、官位、人倫、支体」門では〔け〕が多く表れるが、「気形、草木、食服、器財」門など後になるほどに〔介〕が多くなり、収録語数も最も多い言辭門ではさらに〔介〕の割合が多くなる。これは仮名見出しが〔け〕であったので、それに合わせて当初はケは一律に〔け〕とするという意識があったけれども、後になるほどに当時の慣用的な表記が表れるようになったということもあるかもしれない。「権威（〔介〕んい）・見聞（〔介〕んぶん）、孝養（〔介〕うやう・橋慢（〔介〕うまん）」という具合である。ただ、同じ漢語でも「ケ・ケイ・ケツ」などは〔け〕で表れる方が多い。「化粧（〔け〕しやう）・

稽古（「け いこ・潔斎（「け つさい）」など。「怪我」は「〔け〕が」、「現」は「〔げ〕にも」、「芥子」は「〔け〕し」、「今日」はやはり「〔介〕ふ」である。

- (2) 語頭には「志」、語中尾には「し」を用いることが多いのはよく知られている。行頭、行末には通行のものとは異なる文字を用いることがあると見てよいのではないか（たとえば、曾根崎心中の「盤」のように（坂梨 1979 参照）。
- (3) 例えば「三条西家着到百首和歌」（三の丸尚蔵館）では、「けふ」が近接して三例表れ、そのうち「〔介〕ふ」が一例、他の二例は「〔介〕〔婦〕」で表れている。「けふ」の「け」は「〔介〕」で変わらないが、「ふ」は「〔婦〕」でも表れる。これは「今日」の「け」を「〔介〕」で表す慣用の強さを示すものと言ってよいのではないか。
- (4) 明治大学図書館蔵の八行本には原題簽があり、そこには「曾根崎心中」とある（小野正弘氏の調査による）。これは内題の字体とは異なる。初版本、六行本、八行本の内題はともに「曾根崎心中」である。明治大学図書館蔵の八行本は原題簽（曾根崎心中）と内題（曾根崎心中）で「柀」・「根」とを違えている。初版、六行本については原題簽が現存しないので不明である。
- (5) 「場立て区切りの数は、あまり新古とは関係ないのではあるまいか」（鶴見 1978）という言葉もあるけれども。

参考文献

- 池田亀鑑（1941）『古典の批判的処置に関する研究』（岩波書店）
- 市地 英（2013）「馬琴小説の平仮名字母の研究—読本と合巻の比較—」（『成蹊国文』46号）
- 市地 英（2015）「馬琴読本の平仮名字体—『月水奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に—」（『成蹊国文』48号）
- 市地 英（2016）「馬琴読本『月水奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴」（『成蹊国文』49号）
- 内田宗一（1998a）「黄表紙・洒落本の仮名字体—恋川春町自筆板下本についての比較考察—」（『国語文字史の研究』四）
- 内田宗一（1998b）「『修紫田舎源氏』の仮名字体—作者自筆稿本と板本の比較考察—」（『待兼山論叢』32号）
- 大橋正叔（1997）「新収歌舞伎狂言本・浄瑠璃本六種について」（『ビブリア』108）
- 久保田篤（1995）「草双紙の用字法—赤本の仮名字体の用法を中心に—」（『築島裕博士古稀記念国語学論集』）
- 久保田篤（1996）「浅井了意自筆版下本の仮名づかい—『東海道名所記』『江戸名所記』『因果物語』を資料として—」（山口明穂教授還暦記念国語学論集）
- 久保田篤（1997）「『浮世風呂』の平仮名の用字法」（『成蹊国文』30号）
- 久保田篤（1998）「『金々先生栄花夢』の文字の用法について」（『東京大学国語研究室創設百周年記念国語記念論集』1998年）
- 久保田篤（2001）「『東海道名所記』に見る近世初期仮名遣いの特徴」（『成蹊国文』34号）
- 久保田篤（2009）「江戸板本の表記の多様性—洒落本『傾城買二筋道』の場合—」（『成蹊国文』42号）
- 久保田篤（2014）「『初心仮名遣』の示す仮名遣いについて—活用語尾を中心に—」（『成蹊国文』47号）
- 久保田篤（2016）「『蜷縮涼鼓集』における四つ仮名以外の仮名遣い」（『成蹊大学文学部紀要』第51号）
- 神津武男（2009）『浄瑠璃本史研究』（八木書店）
- 神津武男（2011）『近松浄瑠璃善本集成』第二巻（クレス出版）
- 小松英雄（1997）『仮名文の構文原理』（笠間書院：増補版 2003）
- 今野真二（2001）『仮名表記論攷』（清文堂）
- 坂梨隆三（1979）「曾根崎心中の『は』と『わ』—その仮名遣いと仮名の字体について—」（『人文学部紀要』12 [茨城大学]）

- 坂梨隆三 (1985) 「『ふ』を『ム』とよむこと—浄瑠璃本の場合—」(『国語と国文学』5月)
- 坂梨隆三 (1986) 「曾根崎心中の『う・ふ・む』」(『築島裕博士還暦記念国語学論集』)
- 迫野虔徳 (1974) 「定家の『仮名もじ遣』」(『語文研究』37号 (『方言と国語史』清文堂 (2012) 所収)
- 菅原範夫 (1979) 「大蔵流狂言に見られる平仮名用字法の諸相」(『高知大学学術研究報告』第28巻人文科学) (昭和54年度)
- 玉村禎郎 (1994) 「『春色梅兒譽美』における仮名の用法」(『国語文字史の研究 二』)
- 鶴見 誠 (1978) 「曾根崎心中 解題」『正本近松全集』第四卷 (勉誠社)
- 萩谷 朴 (1988) 「青谿書屋本『土佐日記』の極めて尠ない独自誤謬について」(『中古文学』41号)
- 森 修 (1970) 『曾根崎心中』解題 (新典社)
- 矢田 勉 (1995) 「異体がな使い分けの発生」(『築島裕博士古稀記念国語学論集』) (『国語文字・表記史の研究』(2012) 所収)
- 矢野 準 (1992) 「一九の文字生活—蔦屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に—」(『近代語研究』第八集)
- 安田 章 (1967) 「仮名資料序」(『論究日本文学』29号) (『仮名文字遣と国語史研究』(2009) 所収)
- 安田 章 (2009) 『仮名文字遣と国語史研究』(清文堂)
- 山根為雄 (1981) 「曾根崎心中」の正本について (『藝能史研究』72号)
- 山根為雄 (2004) 『近松正本考』(和泉書院)
- 山本とも子 (1963) 「『曾根崎心中』の諸本」(『近松の研究と資料』第二) 『土佐日記』(1928) (尊経閣叢刊)